

Team-Teachingへの 新たな期待

杉本 薫

(東京都中央区立佃中学校)

Team-Teaching と一口に言っても最近では JTE と ALT ばかりでなく、JTE と JTE の日本人教師 2 名によるものも含まれる。それぞれにねらいがあって用意された指導形態なのだが、ここでは外国人講師や指導助手と JTE との Team-Teaching を中心に話を進めたい。しかし、本稿の指摘しようとしている論点においては、どちらの形態であっても、全く同様に考えていいだろう。

さて、興味深いことに、JTE と ALT による Team-Teaching を語る時、指導方法や指導内容についての議論に比べると、評価に言及することはあまり多くない。これは、ALT が assistant であって、評価に関する責任は JTE にあるという考え方が長い間浸透していたことによるものと思われる。

また、ALT の配置には、学期に数時間程度から年間を通じてほぼ常駐という恵まれた地域まで、当然様々な制約があることも共通の認識に立った議論を難しくしてきたように思う。今思うと、これはむしろ JTE 側に強い傾向だったかもしれない。

以前の教育課程の中なら、配置される時間が少ない場合は、ALT を一時的なゲスト・ティーチャーとして、普段の授業と離れたいわゆる「投げ込み教材的」に活用することも可能であった。「外国の文化的な話題や、ゲーム的な言語活動を特別に取り上げて、外国人の講師と英語を使う楽しい体験」という行き方も珍しくはなかったし、またそれはそれで、その当時においては、意味のある学習であったとも言える。最近なら「総合的な学習の時間」の「国際理解」的なテーマの元にゲスト・ティーチャーを招いて行われている例の方が多いかもしれない。もちろんその場合は英語には全くこだわらないわけだから話は別になる。

しかし、今は違う。いくら配置される時間数が少ないからといっても、週 3 時間の英語の指導計画の中に、このような「投げ込み教材」の割り込む時間を確保することは非常に難しくなっている。授業のカットが全くなく、すべての時間をきちんと授業に当てても、現行の教科書を隅から隅まで完全に終わらせることすら至難の業と言えるのだから。

ならば、Team-Teaching といえども教科書の進度や題材、言語材料等を十分にふまえて指導計画の中に織り込まなければ、我々は非常に簡単に自分の首を絞めてしまうことになる。

ここで、「評価」の話に戻る。声高く「指導と評価の一体化」の大前提を叫ぶまでもなく、このように現教育課程の中の英語の授業における Team-Teaching は、すでに評価そのものにも深く関わらざるを得ない状況にあると言える。そして、この観点は今我々が Team-Teaching に期待することの 1 つである。

ある音読テストの展開から

少人数制による授業編成とは別に、Team-Teaching による指導の形態の工夫として、学級を分割したり、生徒を抽出して個別の指導を行うことも多くなっている。ここで私の実践を一例として紹介したい。

私は、レッスンの終了に合わせて、「音読のテスト」として生徒が一人ずつ ALT の前で教科書のあるページを読み上げさせている。音読だけであれば一人 1 分程度でできるので、だいたい 1 時間で全員に体験させることができる。もちろん他の生徒については同時に私の方で一斉授業を進めている。ただ、授業とはいっても、生徒が順番に抜けていくのだから

ら、普段と全く同じやり方はできない。私の場合は普段できないような writing の指導や関連の小テストなどを行う時間に設定している。

音読テストのねらいは生徒の音読練習量を増やすことと定期的に生徒の力をつかむことにあった。ALT と 1 対 1 という少し緊張を強いる状況下でのテストは英語学習の動機付けと意識を高める効果もあり、全く読めない生徒はほとんどいない。事前に通告するので生徒はかなり練習をしてくるからだ。ここですでにねらいの大部分は達成できている。テストの状況はビデオで撮影しておくので私の方でも点検することもできる。

実は、このテストのもう 1 つのねらいである生徒の音読の力をどのように測っていくか、あるいはどのように育てていくかというところに大きな課題があった。それは、実際に測定する ALT の感覚と私の感覚のすりあわせの方法である。音読そのものに対する考え方から配点と基準の設定までじっくりと時間をかけて話し合っていないとこの方法は成り立たないのだ。

この音読テストは私の授業の中では ALT と生徒の会話の機会として発展し、最近「面接テスト」という意味合いが強くなってきた。面接という形式の中で生徒の speaking 能力の進歩を見ることができるようではないかと実践研究中である。

目標を共有する努力

東京都中央区では英語部会の事業として、毎年 8 月にワークショップを実施している。このワークショップはすでに 8 年の歴史があり、昨年は墨田・荒川・葛飾・港・品川・大田・目黒の各区の英語部会が合流して、8 区合同で実施された。

このワークショップの大きな特長は、いくつかの区に ALT を派遣している企業の協力により実際に現場で T-T を行っている ALT・NT (native teacher) が多数参加していることである。そして、これは当初から Team-Teaching のワークショップとして企画され運営されている。当然話し合いはすべて英語で行われる。

さて、ここ数年間このワークショップで議論された話題は、具体的な指導やテストの方法、JTE と

NT それぞれがお互いに持っている Team-Teaching への期待と課題、そして “grammar vs communication” といった視点からの授業の見直しなど様々である。これは「評価と Team-Teaching」というまさにこの視点に立った議論であったと言える。

そして、このワークショップの最大のねらいは、ここでの議論を元に、Team-Teaching における 2 人の指導者、JTE と ALT・NT の間で英語学習の目標を共有することにある。言い換えると、いかに同じスタート地点に立つかということである。スタート地点を確認することは、そこからのレースの展開や作戦、そしてゴールの位置も確認することになる。何を目標に、つまり「評価規準」をどこにおくかという議論なくして、Team-Teaching はあり得ない。

授業改善の突破口

生徒数減少に伴う学校内や地区内の英語科教師数の縮小、絶対評価をはじめとする教育改革への対応に追われる中での毎日の忙しさなどの要素は、このような視点からじっくりと授業を見直していくことを非常に難しくしている。その中で Team-Teaching は教師同士の議論を喚起し推進することができる。つまりは、実際の授業改善の突破口としての大きな可能性があると言える。

最後に引用するのは先に紹介したワークショップの企画を手伝ってくれている Ron Martin 氏 (獨協埼玉中学高等学校) が昨年のワークショップの議論を整理した報告書の文頭で書いてくれた言葉だ。これが Team-Teaching の文脈の中で語られる時、授業を改善していく突破口としての Team-Teaching が見えてこないだろうか。

“Our expectations are not the end. They are not the test. They are the beginning. From our expectations, we should begin our first lesson. Our expectations should be in everything we do. Our students should know all of our expectations. Our expectations should grow — not change.”

— On Expectancy

Ron Martin, Dokkyo Junior High School